

れ、放射線を利用する非破壊検査のビジネスを立ち上げられました。“水と安全はただ”という社会通念が広がっていた逆風の中で大変な挑戦でありました。“安全の防人（さきもり）たらん”との強い信念を貫き艱難辛苦を乗り越え、今日の非破壊検査株式会社に育て上げられました。またこの間、非破壊検査業界を近代産業の一角として重要な地位に押し上げられました。知に聡く情に篤く気骨のある経営者として広く知られ多くの人々から尊敬されていました。私事になりますが原子力発電所や火力発電所の安全確保の基礎となる仕事を担っていただき、大変感謝しています。

当協会運営のお手伝いをさせて頂き、山口様にお会いする機会が増え、その時々新鮮で含蓄のあるお話を伺いました。

非破壊検査（株）が中国に進出するための話がほぼ纏まり会食が催され、当時の上海市長が同席していた時の話であります。戦争のことが話題になり市長が“極端な話だがもし一対一の相打ちになったら日本人が一人も居なくなっても中国人は十数億人残っている”と話したそうです。山口様は纏まりかけていた話をすべてキャンセルされました。その市長が江沢民であり、“あの人があんなに偉くなるとは思わなかった”と仰っていました。昨今の国際情勢を踏まえると、日本の政治家も企業経営者もこのような姿勢を大いに参考にして欲しいと思います。

我が国のエネルギー安全保障上原発の利用が必須であるとの意見を一貫してお持ちでした。この主旨で日刊工業新聞に意見広告を度々出されており、数年前に同様の意見を読売新聞に出された後にお会いしました。読売の読者から多数の賛同意見やコメントが寄せられ、反対、批判の意見はほんの僅かであった事と反響の大きさを喜びながら話される笑顔を今も鮮明に憶えています。

ベンチャーを大企業に育て業界の価値を高められただけにとどまらず、芸術や文化にも深く関わっておられました。特に童謡、唱歌、民謡など世代を超えて歌い継がれるべき“日本のこころ”の普及に務められ、これらを披露する合唱団の支援に大変力を入れておられました。青少年期を過ごされた群馬県に特別の想いを抱いておられ“名月赤城山”はとくにお好きなおようでした。

台風一過の晩夏に頂戴したお手紙の冒頭に“秋来ぬと 目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる 藤原敏行作 日本に四季のあることを確認しホットした一日でした。”と記されていました。お人柄が偲ばれる一端でもあり、多くの人々に親しまれた由縁でもありましょう。

あらためまして、賜ったご厚情に感謝申し上げますとともに
安らかに眠りください。

(合掌)

山口多賀司副会長と ONSA のつながり

ONSA 事務局

山口多賀司副会長が 2022 年 2 月 4 日に逝去されました。

ここに生前のご厚情を深謝し、山口多賀司副会長と ONSA のつながりを振り返ります。

山口多賀司副会長は 1984 年 ONSA 設立を主導され、以後 38 年連続で副会長として運営を主導頂されました。ONSA 役職員でこの勤続記録を上回る者は皆無です。山口多賀司副会長の尽力がなければ、ONSA は存在してなかったかも知れません。

ONSA は山口多賀司副会長が中心となって「設立趣意書」を 14 名の連名でまとめて、産官学の連携のもと、1984（昭和 59）年 4 月に大阪国際ホテルで岸昌大阪府知事をはじめ大阪府立放射線中央

研究所長・松村隆所長以下幹部職員と 56 の企業代表者の出席を得て、設立総会が開催され、任意団体として設立されました。

ONSA 発足時の首脳体制は、会長に坂本勇氏（住友電気工業相談役・元会長）、副会長に濱口俊一氏（関西電力・副社長）、田村清氏（三菱重工業・大阪支社長）、山口多賀司氏（非破壊検査・社長）、石王道夫氏（大阪科学技術センター・副会長）、浅野聡一郎氏（浅野歯車・社長）でした。会長職は発足時から坂本勇氏に 8 年間就任頂き、以後は関西電力の首脳に就任頂いております。

初代事務局長に大阪府立放射線中央研究所を定年退官された古田純一郎氏（現在の ONSA 副会長・大阪府立大学放射線研究センター長古田雅一氏のご尊父）を迎え、1984（昭和 59）年 4 月現在 ONSA が入居のサンエイビル 4 階で活動を開始しました。

その後、ONSA は 1988 年に非営利の「社団法人」、2011 年に国の法人制度改革に伴って「一般社団法人」に移行しました。

ONSA は設立以来、山口多賀司副会長のご尽力を頂き、概ね良好な運営・経営を保ち順調に研究会開催等の産学連携業務を推進しています。

ONSA の産学連携業務の詳細は下記の記念誌等に詳細を記述・配布済みです。

1994 年 4 月 大阪ニュークリアサイエンス協会設立 10 周年記念誌

2016 年 1 月 一般社団法人大阪ニュークリアサイエンス協会 法人設立 25 年の歩み

山口多賀司副会長は早くから非破壊検査の重要性を認識され、若くして 27 歳で非破壊検査株式会社を設立され、以後高度成長時代にも乗り、積極的経営で順調に業績を伸ばされ会社も創業 65 年を迎えます。

山口多賀司副会長はベンチャービジネスのはしりでした。自ら小型軽量高性能で、放射線安全性の高いイリジウム透過検査装置（本体重量約 20 kg）を開発され、従来からの過酷な重労働を強い検査作業を軽快な知的作業に一変させ、かつ従来の工業用エックス線装置では探傷不能であった配管等の狭隘部の検査を可能にさせるなどして、放射線検査だけでなく、超音波、磁気、渦流探傷検査等々の新技術機器を導入され、これらを取り入れた高精度高能率検査システムを確立した功績は多大なものがあります。

非破壊検査（株）では、数百台の非破壊検査装置を全国各地に展開しており、野外、高所などの悪環境の場所での使用形態も数多くありますが、放射線や一般安全教育・訓練・安全管理が徹底しており、その功績が認められて科学技術庁長官賞（放射線安全管理功労者事業所）を平成元年 1 1 月に受賞されました。

特に高く評価されたのは、非破壊検査業を国民に周知させ、これに関係する技術者に生き甲斐を与えるために、日本産業分類で単なるサービス業に一括されていた非破壊検査業を昭和 59 年 1 月 10 日付で行政管理庁告示により新たに「非破壊検査業」として細分類させた点にあると思われま。加えて非破壊検査（株）の技術者に非破壊検査関連の放射線・超音波、磁気、渦流探傷等々各種技術資格をわが国だけでなく、米、英国など海外の資格も取得させることにより、一人多役の技術者集団を作り上げ、公正で権威ある第三者検査機関としての機能を確立されました。それにより事業は新幹線の根幹をなす世界初の溶接レールの施工検査をはじめ、石油・ガス化学プラント、原子力・水力・火力等エネルギープラント、青森県六ヶ所村原燃再処理プラントから、船舶、橋梁、橋脚、ビル等々多岐にわたり、信頼性の高い検査を必要とするものの多くを対象として実施してきました。

企業の規模が大きくなると、経営者はどうしても企業防衛に走りがちで、新しい分野への大胆な挑戦が影を潜めるものであるが、山口多賀司副会長は常に前向きな積極的経営で新分野にも歩を進めてこられました。この挑戦の記録から、山口多賀司副会長の起業家精神を受け継いで、それぞれ

の分野で可能性をフルに発揮して相乗効果を高められることを期待いたします。

山口多賀司副会長の足跡の一部紹介

1. 氏名 山口 多賀司 (やまぐち たかし) ONSA 副会長
2. 生年月日 昭和 5 年(1930 年) 4 月 3 日生 (満 91 歳)
3. ご略歴
 - ・1957 年 6 月 非破壊検査株式会社を創業
 - ・1979 年 10 月 代表取締役社長に就任
 - ・1999 年 4 月 取締役会長に就任
 - ・2009 年 7 月 社主に就任
 - ・1984 年 4 月 ONSA 副会長に就任、以後 38 年連続で ONSA 運営を主導
4. 主な受賞歴
 - ・1966 年 3 月 プラントメンテナンス賞 ((社) 日本能率協会)
 - ・1984 年 1 月 (社) 中小企業研究センター賞
 - ・1986 年 4 月 毎日経済人賞(毎日新聞社)
 - ・1987 年 4 月 科学技術庁長官賞(科学技術振興功績賞)
 - ・1986 年 1 月 国際貢献者賞(日刊工業新聞社)
 - ・2000 年 4 月 新技術開発功労者賞 (大阪府知事)
 - ・2000 年 11 月 大阪府商工関係者表彰(大阪府知事)
 - ・2002 年 5 月 憲法記念日知事表彰(産業功労者) (大阪府知事)
 - ・2004 年 11 月 旭日小綬章 (天皇陛下への拝謁、内閣総理大臣)
 - ・2008 年 1 月 財界経営者賞 (財界研究所) など。

会員の紹介



- ◇ 氏名
- ① 所属
- ② 連絡先
- ③ 学歴や職歴
- ④ 専門分野、業績
- ⑤ 趣味など個人の紹介
- ⑥ 読者へのメッセージ

◇ 氏名：速水 弘之 (はやみ ひろゆき)

- ① 所属：三菱電線工業 OB (定年退職済み)。今は「スーパーハイスクール」に指定の兵庫県立・神戸高校・総合理学科においてサイエンス・アドバイザー (SA) 役を、2015 年～現在まで継続従事のみ。
- ② 連絡先：072-773-1303、080-1428-9833、h_hayami816@yahoo.co.jp